

北国の歩いて暮らせる環境(まち)づくり



北海道大学大学院工学研究科助教授

野口 孝博

自立生活を支えるまち

高齢社会の進展に向けて、取り組まなければならない生活環境整備の仕事はあまりに多い。身近な住まいと地域のあり方、とくにその移動(歩行)環境も早急に解決が迫られる課題の一つである。介護のために人的余裕のなくなるこれからの時代、高齢者や障害のある人たちが、それぞれ自分たちの力で(自立して)歩いて暮らせる環境づくりは必須のことである。電動車椅子や将来開発が予想される簡便な歩行機器など、ある程度の移動支援機器の導入は想定しても、基本的に高齢者の人達が自らの力で、車椅子や杖などもつかいながら移動して暮らせるような環境になっていなければ、社会が成り立たない状態になることは容易に想像できる。

さらに、冬の問題がある。たとえば高齢者がツルツル路面の道をおっかなびっくり歩いている姿は見るだけでかなしい。雪の降る日には家の前の除雪が追いつかず、近くの買い物や病院通いなども安心してできないような状態の日が続くことがある。冬はなるべく出ないようにしているという言葉がよく聞かれる。それでよいのであろうか。だれもが冬も気軽に、そして安心して外出できるようなまちができないものであろうか。そのため

の新たないえ・まちづくりの方策が求められている。高齢者・障害者の自立生活の支援に大きくかかわる住宅とまちの歩行環境に焦点を当てて考えてみる。

外出をひかえる高齢者

札幌市内の戸建て住宅に住み自立歩行ができる健康な高齢者と障害者(杖歩行、車椅子など)百数十人の人達の夏冬の外出状況を調べたことがある(注1)。それによると、夏はほとんどの人が元気に(歩いて)買い物や病院に行ったり、老人センターや福祉センターに通っているのに対して、冬は様子が大きく変わる。まず外出をよくする人達でもその頻度が落ちる。例えば、健全な高齢者の場合で冬毎日外出する人の割合は、夏の半分程度になる。さらに障害のある高齢者の場合には悲劇で、夏は何とか歩いて外出できたのが、冬はそれがほとんど困難になる。外出する場合でも介助者がついて車による送迎になるケースがほとんどである。つまり一人では無理なのである。冬はできるだけ外出をしないという高齢者は半数近くに上る。中には冬期在宅生活が無理なために病院に入るケースさえ生じている。

その原因の一つに住宅のアクセシビリティの問題がある。住宅の床が高いのとアプローチの雪処理である。近年北海道では物置や車庫を下階にとるために、極端に床の高い住宅がふえている。1階の床が地面から1m位あるのはふつうで、2mを越す住宅も少なくない。たいいてい玄関前には大きな外階段がついている。元気老人でもこのように高く急な階段を上り下りするのはたいへんである。ましてや雪の積もる冬は危険ですらある。外出時にこうした出入り口の段差が障害になっていると応える高齢者は圧倒的に多い。その上玄関前アプローチの雪処理がある。除雪に煩わされず、いつでも出歩きやすい住まいを望む高齢者は多いのである。

そのためには住宅の形態を根本から考え直すこともしなければならぬ。必要に迫られてつくら

野口 孝博氏(のぐち たかひろ)

1949年釧路市生まれ。1971年北海道大学工学部卒業、一時民間をへて1978年北海道大学大学院工学研究科博士課程修了、1993年から北海道大学助教授、現在に至る。専門は建築計画、北方建築・都市デザイン、高齢者の住環境計画。共著に「北海道の住宅・住様式」(北海道大学図書刊行会)、「雪と寒さと建築Ⅰ・発想編」(彰国社)など

注1) 野口孝博、「北国における在宅高齢者・障害者の外出環境とユニバーサルデザイン住宅一人とふれあい、冬も外出しやすい家づくり」、青森北方都市会議冬の都市フォーラム論文集、365-370、2002

れる高床住宅ではあるが、最低限階段を建物内に取り込む工夫が必要である。さらに住宅のアプローチ部分を屋根、壁などで適宜屋内化する、あるいは必要に応じて垂直移動支援機器との連携を考えた新たな住宅計画の導入も望まれる。が、思いきり発想を変えて住宅そのものを低床化することなどもこれからの目標に入れて考えられるべきである。

歩きやすいまちの環境

住宅とともにまちの歩きやすさを考えなければならぬ。そのためには歩道の除雪をきちんとすることや場所によってはロードヒーティングを施し、すべらない道を確保することが肝要である。しかしまち中の主要なルートについては、屋根などで覆われた歩廊を連続的に設けることも考えられてよい。

青森県の西部、津軽半島のつけ根に木造（きづくり）という小さな町がある。縄文の遮光式土偶で知られる町だが、その中心商店街に「こみせ」という内部化された歩行空間がある。各店先をつなぐように庇とガラス戸による連続式の屋内歩行空間が町中に数百メートルにわたってつくられているのである。残念ながら今はところどころ途切れているところが多いが、それでも100mほど連続している中心部のこみせでは、冬の間そこが高齢者にとって安心して歩ける道になっている。風がつよい町で、地吹雪の日などに買い物にでかける近所のお年寄りたちはようやくこみせにたどりつく。しかしこみせの中に入ってから、からだの雪を払いだれでも安心して歩いている様子を見ると、観察者の方がほっとするのである。こみせの中は、商店の店先と一体化しているために室温もある程度維持されている。何よりも雪や冷たい風に煩わされず安心して歩ける環境が用意されているのが注目される。近所のお年寄りも直線的に配置されているこみせのどこかにたどり着けば（引き戸でどこからでも入れる）もう安心なのである。ガラス戸が連続した言わばガラスの道である。このガラス戸はたいてい夏は外されて、こみせは外と一体になる。なお、こみせは個人の敷地内につくられている。したがってそこは私的スペースの提供空間として成立している。維持管理はもちろん各商店、個人が行っている。

こうした連続型の屋内（半屋内）歩廊は国内では同じ県内やまた新潟県などが有名である。また海外ではカナダ諸都市のプラスフィフティーン、

またイギリスの歴史都市チェスターのロウズなどが知られている。それぞれその成立背景は異なるものの、北方都市のユニバーサル環境としては大きな意味をもつ。このように雨や雪の日にとえ車椅子一人でも連続して町中を動きまわられる環境が大事なのである。

集住とサービスの連携

住宅の集約と各種施設との連動が今後ポイントになる。町家型の住宅（高密度の都市型戸建て住宅）や集合住宅を利用して住宅を集合化し、それらと近隣生活施設を連動させることを考えるのである。そのためのネットワークの役割を屋内型歩廊空間が果たすことになる。従来住宅と各種施設群とは分離して（都心と郊外で）設けられていた、高齢社会においてはたとえ一人でも不自由なく暮らせるようにすることが大事で、そのためにも住まいと施設の連携が重要な意味をもつ。

場合によっては欧のサービスハウスのように高齢者の住宅群の下にレストランやサウナ、図書室や趣味室など、さまざまな最寄り施設が連携したサービス密着型集合住宅の考え方もある。いずれにせよ住宅機能と各種サービス機能が連携して、冬でも安心して暮らせる環境にすることが大事なのである。そのためには集合住宅の低層部分は公共階にして、屋内歩廊を貫通させながら連続化するのもよい。まち中にあるのは隣り合う建物がそれぞれ1階（または2階）の前面を公共通路として提供し合うことをもっと積極的に考えてよい。その際、公共的な空間提供のルールを設けること、また、道路と建築との融合型計画論の開発も必要である。

ゆたかな発想と市民意識

より深刻な形で到来する高齢社会と、私たちは真剣に向き合わなければならない。その社会・経済構造が、どのような生活環境・居住のかたちを要求するのか、北方都市独自の視点から改めて問い直して見る必要がある。もとよりモデルはない。集住によるコンパクト都市、連続型歩廊空間都市、休息・思想都市、農・自然共生都市・・・などさまざまな将来の都市・居住環境理念は考えられる。大事なのはそれらの都市の構成員である高齢者、障害者の人たちを含めた共有のライフスタイルと新しい居住環境構築のためのゆたかな発想力、そして市民意識形成のための緻密な作業プログラムが必要なのである。